

その声は聞こえないのに、その響きは全地にあまねき、その言葉は地の果てにまで及ぶ」その事実である。(マタイによる福音書五章、詩編十九篇) 私はその事実を「命のたぎり」と言い表してきた。

×

×

「然り」の世界「否」の世界を、イエスは「山上の教え」に於いて具体的に提示された。それが「しかし、わたしは言う」の世界である。この場合、イエスの提示は、提示する者であると同時に、イエス自身が事実と化して「事実」を提示されたのである。その場合の「わたし」とは、歴史的なイエスでありつつ、同時に「事実それ自体」のイエスでもあるのだ。これは「イエスとは誰か」という聖書の教えにとつて大切な所謂「キリスト論」の問題となるので、これについては後で一緒に考えることにする。とにかく、イエスが提示した「事実の世界」は人間の知性の尺度から判断される善でも悪でもない。善人だから雨を降らせ太陽を照らすのではない。ここでは善人も悪人もなく、同じように降らせ照らすのである。つまり、そこでは善や悪を超えている。人間の知性的な判断、判別を超えている。知性の立場から、その事実の世界を見るなら、「すっからかんのすっからか」と言うほかない。イエスの言葉でいうなら「徹底したところの貧しさ」に於いて現成してくる「神の支配」そのことである。(マタイによる福音書五章三節)

×

×

「然り」「否」の事実の世界のそこでは、「誓う」ことも「復讐」することも、「敵も味方」もない。さらに「善行による人からの称賛」も、「形式的な祈り」も必要ではなく、すべて無化される。さらに、「思い悩むこと」もなくなる。（マタイによる福音書五章三十一節以下）これらの総括としてイエスは、次のように言われた。

だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。……空の鳥をよく見なさい。種を蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父（神、超越者）は鳥を養つていてくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが思い悩んだからといって、壽命をわずかでも延ばすことができようか。……野の花がどのように育つか注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく、栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほども着飾つてはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装つてくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。……だから、「何を食べようか」「何を着ようか」と言つて、思い悩むな。……あなたがたの天の父（神）は、これらののがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりも先ず、神の国（支配）と神の義を求めなさい。

人間の一切の計らいに先立つて無条件に、すべてのもとに成り立っている神の命のたぎりとしての事実がある。これは信ずることによつてと同時に覚めることによつて、どの人にも現成してくる。

×

×

宗教に於ける信の立場とは、自分の向こう側に神や仏を立て、立てたそれを対象化して信仰するということである。それに比して、覚の立場は、自分の向こう側に何かを立てるのではなく、自己が成り立っているその根抵に目覚めることである。

一般的に、ユダヤ教もキリスト教も人間は神に創られた者として、神と人は他者同士、神は聖なる天地の創造者として人間から無限に離れ、絶対の他者だとされている。つまり神は聖なる天においてになり、人は俗なる者（罪人）として地に在る者とされている。そこでは、神は人にとつて対象化して信ずるお方となる。その場合、ユダヤ教に於いては、絶対の他者なる神を「律法」に見いだし、ひたすら神の人に対する契約の書として「律法」を対象化して守ることが神に従うことだと信じ、その律法を遵奉した。例えば、律法中の律法と言われる「十戒」は、旧約聖書に登場するイスラエルの偉大な宗教的指導者モーセが、神の山であるシナイ山で顕現した神の

直接の語りによって二枚の石の板に刻まれたそれを受け取り、神の書として契約の箱に納められ、神の臨在のしるしとされ、イスラエルの民が進む先頭で担がれていた。(出エジプト記二十章、ヨシユア記三章、六章)その後、与えられた律法はやがてユダヤ教に於いては「タテ四十五センチほどの羊皮紙に書かれた律法を両側から巻き、金属のカバーで覆ったそのつぺんに王冠をかぶせるようになる。これは、王冠をかぶっていいのは律法だけであって人間は絶対かぶってはいけない」という考え方から出ている」ことになる。

以前に機会があつてユダヤ教の会堂で行われる礼拝に参加したことがあるが、そのとき会堂正面祭壇にあたかも、それを礼拝するかのようになり、律法の巻物が立てて開かれて、その前で祭司が鐘を振り鳴らし律法の一節を朗々とうたいあげていた。とにかく、ユダヤ教徒とは、律法遵奉者集団だと言える。そこでは神即律法として対象化し、信じ崇めるといふことだと言えよう。

×

×

神を対象化して信ずることは、キリスト教一般に於いても同じである。キリスト教の場合には、イエス・キリストを神の唯一の啓示者、唯一絶対の救世主、その教えは唯一の真理としてキリストを告白し信仰する。その場合、その真理を保証するものが聖書であるとし、聖書の言葉への絶対の服従が神への従順だとされる。とすると、先のユダヤ教に於ける「神・律法」が「イエス・新約聖書の文字」に代わっただけとなる。その結果、ユダヤ教が「神・律法」を対象化して担ぎ

まわつたと同じようにキリスト教は「イエス・キリスト、十字架、聖書の文字」を対象化して担ぎまわることになった。

×

×

「キリスト・聖書の文字」を対象化して担ぎまわるといふことは、イエス・キリスト（イエスの存在と十字架の死と復活）と聖書の文字が、世界や人間の救済の根拠だという唯一絶対の真理の保証であることの信仰の表明である。しかし、イエス・キリストや聖書は、決して真理の保証なのではない。そのようなところから、偶像化が生じる。偶像とは、相対的な物や事や人を絶対的なものとして対象化することである。宗教は最もその危険に常にさらされると言えよう。ひよつとすると「キリスト教」もそのような落とし穴に落ちてはいないかと厳しく問い直すことは大切である。

それにしても、聖書やイエス・キリストは、真理を証示するものであつて、それ自体が真理ではないし、又真理を保証するものではない。聖書に書いてあるからその文字は真実なのではない。イエス・キリストが語つたからそれが真実なのでもない。イエス・キリストが生涯をかけて証示した事が真実なのでイエス・キリストは限りなく尊く真実なのである。そして、どの人も、その真実に覚めるとき聖書やイエス・キリストの真実に人をおかかしめるのである。

×

×

先ず、真実それ自体としての聖書があり、その聖書からの出発が神からの出発としてはならぬ。それは聖書を偶像化することである。大切なことは、聖書の教えが何処から出て来て、何を証示しているかを知ることである。

聖書の教えが出てきたところ、又は、聖書が証示する事とは、一口に言うなら、人間存在を含めすべての事柄の根底に躍動する「命のたぎり」その事だと言える。命のたぎりその事は、人間の分別以前又は言語以前の事実、人の自我や観念の向こう側にある事実である。言うなればそれは「超越的リアリティ」だと言えよう。

×

×

以前に、ヒマラヤシザーと一体となった私の体験を紹介したことがある。その出来事は、それまで私が固定的に持っていた物事についての観念（考え方やそれについての内容）が、全く誤りであったことを教えてくれた。

私が見て知っていると確信していた、目の前のヒマラヤシザーという樹、空に浮かぶ雲、さらに、私は私だと確信していた私、などすべてが、実は私が勝手に作り上げていた観念の幻想に過ぎず、それらは本当のもの、即ち実在ではなかったという覚^きづきである。本当はその樹も雲も私も無いのだ。

「無い」というのは、私が私の観念で言葉化して捉え見ているそれらが、本当にそれであると

思い込んでゐる、その有無ではないということ、即ち究極の有無ではないという意味での「無い」ということである。その結果、有無の向こう側から、又は有無の根底から現成してきた事実が、所謂一切の有無を現成させており、その命の事実が「命のたぎり」そのことであることに覚めたのである。私はそのとき、根源的な命の事実に覚づくことなく、物事を自我の観念で象的に構築していた自我の支配から開放されたのである。

×

×

その後、幾つかの同じような体験を経るにつれて、福音書におけるイエスの言動が、何処から出て来て、何を証示しているのかというそれが、それまでとは全く違つて全身で了解出来るようになってきた。

熱烈なユダヤ教徒であるパリサイ宗の人が「神の国はいつ来るのか」とイエスに尋ねた。そのとき「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にある」と言われた。(ルカによる福音書十七章二十節以下)すでに幾度も述べてきたとおり、「神の国」とは「神の支配」ということである。つまり、イエスが言われたことは「神の働きとしての神の支配は、あなたがたの内にあるのであつて、『あそこにある』とか『ここにある』とかいう事ではない」と。「あそこ」とか「ここ」とは、言うなれば対象的な観方である。それに対して、イエスは神の働きを人の内に見い出している。

イエスは人間の一切の思い計らいに先立って、すでにたぎっている神の命を人の内に見ておられ、それを看みなさいといわれる。だから、神の支配とは、自分の成り立ち、世界の成り立ちの元のところであり、そのような人と神との関係、また世界と神との関係は、一切に先立ってある神による大決定なのである。その意味では、人としてのイエスが存在しようがしまいが、それとは関係なくすでにある「事」なのであって、だからこそイエスはその大決定の命のたぎりを「父ちゃん」と呼び、一切の言動が為し得たのである。

×

×

だから、言っておく、自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな……。 (マタイによる福音書六章二五節以下) とイエスは言われたが、これは「お昼に何を食べようか」「外出するのに何を着て行くか」というような事を悩むな、考えるなどということではない。人間は誰もが自分の身体を引きずって生きている。身体という形に限定されたものを誰もが自分の思いとは関係なくすでに与えられている。しかし人間は肉体だけでなく心という精神の働きがある。その精神の働きは、肉体と違って自由な働きが許されており、人間はそのために色々なことを考えたり、身体を使ってさまざまなものを生産し、自由に自分の思うとおりに行動が出来る。そのように人間は自分の知恵と感性と意志とにより肉体を使いさまざまな事が出来るので、大きな錯誤に陥ってしまう。それは「自分の主人は自分である」と

思い込んでしまうことだ。自分は自分で自分を決定出来る者だと思い込んでしまう。自分の根っこが自分であるかのように錯覚してしまふ。かくして人間は万物の長のようにならぬまい、世界が人間の為にあるかのような幻想を抱くにいたる。しかし、そのように人間が思い込んだ途端に、人間に不安が生じて来る。何故なら人間の根っこは人間の肉体でも精神でもないのだから。

×

×

どの人間も人間であることを自分で選んだのではない。それは、鳥も同じ、花も同じであり、その次元では花も鳥も人間も自己決定出来る存在ではない。全てに先立つ神の大決定ある。だが、その大決定の内、人間は特別に自己決定出来るように精神が与えられているにすぎない。だから、自己決定が出来るから人間なのではなく、神の大決定に人間の自己決定が限界づけられているから人間なのである。これが「創造に於ける人間の自然」なのである。人間の内に神の大決定が命のたぎりとして働いているから、人間が人間として、私が私として成り立ち得るのである。それ以外の場に人間の居場所はない。これこそ神の支配その事にほかならない。実に「神の国（神の支配）はあなたの中に躍動しつづけている」のである。それは信ずる対象ではなく目覚めることであり、その覚のところで、思い悩みは無いのである。イエスの「悩むな」という言葉は、その覚つまり神の支配から出て来て、その覚、つまり神の支配を証示しているのである。

×

×

記したり、語ったりする言語は、記した人や語った人の思いの表れである。だが、それらの言語がすべて、その人の思いの表れだとは厳密には言えない。例えば、3+3は6であると語るとき、それはその人の思いではなく数学に於ける約束ごとを語っているだけである。このような科学の言語はともかく、普通に人が自分が感じた事や考えた事、また意志したことを語る場合、その人の思いを語っているのである。したがって、それを聞くということは、その人の思いを理解して受けとめるということになる。そのようにして会話ができれば、お互いの思いが理解できて、結果的には楽しい対話になったと言える。「あの人と語り合えてとても楽しかった」と満足する。しかし互いの思いが通じない対話は対話ではなく、互いに自分の思いだけを語った自分勝手な「独り言」になってしまい、語り合った満足感が出てこない。「Aさんと話すと、とても疲れてしまうのよ。Aさんは自分の事ばかり語り、こちらの話しを聞こうとしないのだから」ということになり、Bさんには不満と不快感だけが残ることになる。

×

×

それにしても、先のような対話において残る不快感や不満感は、その対話の何についてのそれなのだろうか。相手が自分の事ばかり語って、こちらから何も語れなかったという不満感であり、また、Aさんの自分勝手な態度への不快感である。結局、Bさんの不快感や不満感の原因は、Aさんが、「わたし」という自分だけの思いを一方的に語り、「あなた」というBさんの存在を

蔑^{ないがし}ろにしたAさんの自己中心的な言動にある。言うならばAさんの態度は「自分だけが有って、他のすべては自分の為^にに有るのだ」という自分についての思い込みに、Bさんは不満と不快感を覚えたのである。このようなAさんの態度を一般的な言い方では「利己主義^{ゴライズム}」と言う。断つてお^くが、私はBさんの心理分析をしているのではなく、人間の存在とその関係について語っているのである。

× ×

「利己主義」を国語辞典で引くと「自分だけの利益・幸福・快樂を求めて、人の立場を全く考^えない態度」と説明してあるのが普通である。

しかし、「利己主義」的態度には、ただ自分の利益だけを求めるといっただけでなく、その態度の根っこには「自分は自分によって、自分なのである」という自我意識が働いているのである。つまり、利己的な生き方の根底には、「自分の存在の根底は自分である」という傲慢な自我意識が在り、そのような自分自身の存在了解が利己的態度、また生き方を生み出しているのである。しかし、そのような自分についての存在了解は一種の虚構なのである。確かに存在すると思つてゐる「自分」というものは無いのだ。にもかかわらず「確かな自分」が存在すると思つるのは人間の観念が造りだした仮構なのである。

自分は自分自身の支えによって生きてゐるように思つても、本当のところは、自分を越えた大

いなる命のたぎりこそが、自分の根底であり、それが自分を自分として成り立たせているのである。そのような命のたぎりに自分が開眼し、自分なる者の仮構性に気付くそこに「覚」がある。

×

×

ここで、普通「自分」と称している自分を日常の在り方で見ると次のように「自分」を区分出来る。通常、自分をさして「わたし」と言っている。しかし、その「わたし」は、別な者から見る時、その存在は「あなた」となる。また「わたし」と「あなた」から見る自分は「かれ」となる。さらに、全く知らない者が、或る特別な状況に於いて「自分」を見ると、「一個の生物」となり、さらに、全く無関心な者から見るとき、「自分」なる存在は「ただの物」、つまり風景の一つになってしまう。事実、私たちは日常に於いて、「自分」という人の存在を「あなた」と言ったり「かれ」と言ったり、「ただの物」「一つの風景」のような存在として見、かつ感じたりして社会的に関わっているのである。とするならば、私たちが確かな存在として「自分」と称している自分とは、自分が自分について思い込んでいる幻想または仮構なのだと言える。

×

×

とすると、「わたし」と言葉で語り称する「わたし」なる独立したそれは、どこにも存在せず、ただ言葉の上だけ、私の観念の中だけで存在するにしか過ぎないということになる。以下「あなた」と称されるそれも、「かれ」と称されるそれも、さらに「あの物」「風景の一つ」なるそれ

も、総じて「自分」なるそれは、ただ人間の観念が造りだした仮構にしかすぎないと言える。それはあなたも夢の中の「自分」のようである。ひよつとすると、私たちは「自分」について夢を見ているのかも知れない。

×

×

自分という確かな実体がある、と思い込んでいるのが人間の自我である。何度も言うが、自我とは自分は自分であり、自分の根拠は自分だと思い込んでいる自分のことである。つまり「自分は自分によって自分なのだ」とするのが自我である。しかし、そのような「自分」は仮構である。仮構とは実際には無いのに、仮に有るものとするものである。

日常に於いて、私たちはさまざまな事を体験する。見たり聞いたり、触れたり、嗅いだり、それらの事を通していろいろと感じ考え思う。ある時は笑い、喜び、ある時は悲しみ苦しみ、怒る。そのようにして日々は過ぎ去って行く。人生はそのような日々の連続である。しかし、そのような紛れもない人生の一こま一こまを現実だとしているそれらが、「過ぎればすべて夢のようだ」と思うことがある。「いったい、あのことはなんだったのだろうか」と思う。あの時に生きた「自分」は何だったのかと思う。しかし、生きたことは、自分にとって紛れもない事実なのである。にもかかわらず、その事実の根拠は無いのだ。それらはすべて夢のように思えてくる。その意味で確かな者と思い込んでいる「自分」は仮構にすぎない。

自分の仮構性に目覚めるとき、人は「人生の儚さ」に目覚める。「露とおき露と消ゆぬるわが身かな、なにわのことも夢のまた夢」とは、天下人となった豊臣秀吉の辞世だと言われているが、まさに過ぎればすべては儚き夢はかな 幻ゆめまぼろしと化す。それは人生の虚無性のあらわれである。だが、その虚無性とは根柢が欠けているということであつて、ただの虚無だということではない。人生がただの虚無にすぎないとすれば、それは虚無主義となる。しかし、人生は虚無なのではない。

だが、人生が虚無ではないなどと誰が何処で言いうるのだろうか。自分が自分の主体なのだという立場、即ち自分は自分によつて自分なのだという立場。または人間は人間によつて人間なのだという立場。言い換えると自我高揚の立場に人が立つかぎり、人間は虚無から逃れることは出来ない。これは理屈ではない。その事実を近代という歴史が証明した。近代的人間主義はまさしく自我高揚に立った人間の姿である。その結果人間は虚無の深淵に呑み込まれてしまった。虚無の深淵に呑み込まれつつある人間をいち早く十九世紀の西欧世界で察知していたのがニーチェであつたことは誰もが知っている。人間理性の万能を掲げ、人間の無限の進歩を信じて疑うことになかつた、その歴史的状况においてニーチェは虚無主義の到来を鋭く洞察していたのである。彼の予見通り二十世紀の現代にそれが吹き出てきた。事実二十世紀という時代は、経済や政治、民

族や国家、文化や伝統、宗教や教育等が戦争という悲惨を代表に大混乱の時代であった。その混乱は今日世紀末的症狀とともに虚無主義に覆われている。

×

×

今日の私たちがその内に抱く人生に対する深い疑問と不安、政治や経済、科学や宗教や教育、ひいては人間に対する不信等は生きる目的や意味の喪失を来たらせ、人類は暗い虚無のトンネルを抜け出す事が出来ずに苦しんでいる。にもかかわらずなおも、「安し、安し」とし、小手先の改良や変革で事態を乗り越えられるとするなら、必ず人類は悲惨の中で滅び去る事になる。

ニーチェは十九世紀のヨーロッパ文明と徹底的に対決した。それは他でもなくキリスト教文化世界の統一と発展というヨーロッパ人の楽天的な在り方と希望に対して徹底的な「反^{アンタゴ}」を掲げることによる虚無主義の克服である。私は今ここでニーチェを論ずるだけの知識はないし、その立場でもない。また、私の理解するかぎりでのニーチェに全面的に賛同している者でもない。だが一人のキリスト者として彼に深く目を向け、耳を傾けることの必要を強く覚えている。キリスト教会がその伝統的教義を深く反省することなく、今もってその教義を「同語反復」することで満足しているならば、楽天的独善者に成り下がってしまうだろう。徹底的な自己否定が求められる所以である。

×

×

イエスは言われた。

自分の十字架を担^{にな}つてわたしに従わない者は、私にふさわしくない。自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。

— マタイによる福音書十章三八節 —

十字架を担い、自分を捨てる、とは自己否定ということである。しかし、ただの自己否定ではない。それは「自我の否定」ということである。自我を否定するところに、同時に本来の人間の在り方が現成してくるのである。それは自我の仮構性に開眼することである、だが、問題は、どこで自我否定が起こるのか、ということである。

×

×

イエスが私たちに提示すること、また聖書が証示していることは、「所謂キリスト教」ではない。「所謂キリスト教」と称される宗教は、この世に数ある幾多の「宗教」の一つにしかすぎない。したがって、この世に数ある幾多の「宗教」の一つだけを絶対化することは、目に見える相対的な物の絶対化であって、それは独善以外のなものでもない。今流行りの言い方をすれば、それは独善的原理主義になってしまう。

イエスが私たちに提示すること、また聖書が証示していることは、私たちが日常見たり聞いた
りして生きている、その「私」の「存在」、または「出来事」が生起していることの、本当の根
底が何なのかということである。

にもかかわらず、その一点を見ないまま、単なる「キリスト教」という一つの「宗教の教
え」だけを唯一絶対として信ずることになれば、それはこの世に現れた一つの権威の受容であり、
また、その人自身の主観的な確信に過ぎなくなってしまう。このことは、「所謂キリスト教」だ
けのことではなく、世間に有るさまざまな「宗教」信仰に於いても同じであり、また「宗教」の
みならず、この世のいろいろな「主義や主張」に於いても、さらに、この世の「常識的」な一般、
つまり、「お金」「権力」「性」「趣味」「遊び」その他世俗的なもの、加えて「哲学」や「文
学」「芸術」に於いても同様である。

×

×

大切なことは、この世に現れている当の自分自身も含めて、それらが、何処から出てきて、何
を示し語っているのか、ということに悟ることである。また、それらの存在理由が何なのかとい
うことに開眼することである。だが、それを問うことなく、またそれに開眼することなく、現れ
たそれ自体に執とられてしまうならば、それは「この世」に完全に包み込まれてしまったことにな
る。そして、「この世」に包み込まれてしまったそこから出発することが「自我」からの出発と

いうことである。

X

X

イエスや聖書は、言うならば、それ自体を越えている。つまり、イエスはイエス自身を、また聖書は聖書自体を説き提示しているのではなく、イエス自身、聖書自体を通して、私たちが自我で抱え込み考え判断する分別以前の「私」の根源、または「物事」の根底そのことを提示しているのである。その意味でイエスや聖書が提示する世界は自我を越え、分別の枠組を越えている。だからこそ、イエスの提示や聖書の証示を、自我の中に抱え込んでしまつてはならない。

ときとして、少し理屈を弄する人が「イエスや聖書」は西洋のものであつて東洋、とりわけ日本人の感覚に合わない。などと分かつたような事を言う人がいるが、所詮それらは己の分別知としての自我から弄している戯言にすぎない。それは、「キリスト教は唯一絶対の真実の宗教である」と確信している人と同じ自我レベルからの発想である。

結局イエスや聖書が提示し、証示している「すべてがそこから出て、そこへ」という「そこ」つまり、根源的な大いなる命に開眼するためには「自我の計らい、分別的知の働き」を越えねばならないということである。先に述べた言葉で言えば、「自我の否定」としての「自分を捨てて」ことである。それは同時に根源的な命のたぎりへの開眼に連なり、人はそこで本来的な人間となる。

ある時イエスは群衆の一人の質問に答えて次のようなたとえを話された。

ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、「どうしよう。作物をしまっておく場所がない」と思い巡らしたが、やがて言った。「こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまし、こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。」しかし神は、「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。

— ルカによる福音書十二章十三節以下 —

このたとえで、イエスは何を提示されたのだろうか。それは、この金持ちの、生き方、考え方に大切な一事が欠落しているということ。そして、その大切な一事が何かということである。金持ちの事柄への対応の仕方は、世間並に言えば、とても賢明である。彼は、自分が見える世界、考え得る知恵、判断出来る結論から出発する。それは極めて賢明穏当なものである。だが、その賢明穏当な分別が曲者なのである。問題は分別的な知性の働き、または分別知の枠組みから出発

して「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えが出来たぞ。一休みして食べたり飲んだりして楽しめ」と自分自身に彼は言う。「安心せよ」と彼は自分に言う。だが、よくよく考えてみると「安心せよ」という確かな根拠はどこにも無いのである。確かな根拠だと確信している確信の虚しさを「今夜おまえの命が無くなれば、お前が思う安心など、一挙に吹っ飛んでしまうぞ」と神は言われるのである。ここのとこをもう少し注意深く見てみよう。

彼は、「安心せよ」と自分自身に語りかける「自分」が何者なのか、ということに気付いていない。さらに、語りかけられている「自分」が何者なのかということにも、全く気付いていない。彼は、語りかける「自分」、又は、語りかけられる「自分」が実在（実在とは、それ自体が真実に存在している、ということ）だと思ひ込んでいる、その確信から出発している。だが、その確信には何の根拠も保証も無い。彼は、自分というものが確かな存在だと、いわば、自分勝手に思ひ込んでいるのである。その思ひ込みの働きこそが分別的な知性なのである。つまり、自分は確かな存在なのだ、という思ひ込みは、彼の分別的な知性（自我）が作り出した仮構であり虚構なのである。その事実には彼は全く気付くことなく「安心せよ」と言うから「愚か者よ」と神は言われる。

×

×

分別的な知性の働きが生み出すそれらは、言わば何の根拠もないのである。それらはただ分別

的知性（自我・理性）が作りだす仮構なのである。このような働きをする自我は常に望ましい自分を実現させようとする。自我の関心はいつも自我実現に尽きる。自力による道徳的人間たらんとしてさまざまな倫理でもって自分を縛り自己高揚させようとする。自己満足をする。ときとして謙虚であり、自己犠牲的であり、さまざまな善行に努力する。それらの者にとってイエスの言葉や聖書の教えは単なる倫理となる。しかしそれは自己実現を目指す自我の働きにすぎない。イエスはその姿を「偽善者」と言い「白く塗った墓だ」と指摘された。だが、当の者は自分の姿に気付くことなく、善に生きるものとして自己に満足している。このような思い違いのままで、「宗教」や「信仰」を、又「熱心な求道」の道を歩んでいる者がいないとは言えないだろう。先にイエスが金持ちのたとえで提示されたことの一つがそれである。

×

×

では、人がひとしく気付かなければならない一事とは何なのか。それは当の「自分」は自分によって自分なのではなく、自分を越えた「それ」によって自分なのであるという事実である。使徒パウロはこの事実について次のように告白した。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。

—ガラテヤの信徒への手紙二章二十節—

これは、一見不思議な告白のように思うが、彼が語っていることは、「私が今生きているという、この命の営みは、私を越えた大いなる命の働きに担われている」という告白である。彼がこのように自分の生について告白するとき、自分の分別知による推論や結論によるものではない。また、私は信ずる、という単なる主観的な自我による確信でもない。さらに権威ある書物に記されてあることの受容でもない。パウロの告白は、自我または分別知を越えた自己の生の根源の直接的経験から生じたものである。一切の理屈抜き生の根源の命のたぎりからの直接的告白である。その極めつきとも言うべき彼の告白が次の言葉である。

わたしにとつて生きることはキリストです。

—フィリピの信徒への手紙一章二十一節—

×

×

パウロが言う「キリスト」とは、歴史的な存在としての人間イエスのことではない。彼によればキリストとは「霊なる主キリスト」のことである。（コリントの信徒への手紙Ⅱ二一章十七節）事実彼はかつてキリスト教徒を迫害しダマスコへの途上で、死んで甦った霊なるキリストを

直接経験することによって、自己の存在の根源の命に開眼した。彼はその経験を「御子をわたしの内に啓示した」（ガラテヤの信徒への手紙一章十六節）と語る。彼は復活のキリストの顕現を通して、存在の根源なる命のたぎりその事を直接経験した。

存在の根源である命のたぎりは自我を越えて自我を担う働きをしている故に、自我は自我として有り得る。言うならばその命のたぎりは「真の命・真の自己」だと言える。だが、分別的な自我はその人間の生の事実気付かない。それは分別的な自我に対しては秘儀なのである。その秘儀にパウロは直接に開眼したのである。このような秘儀としての生の直接性を「私にとって生きることがキリストである」と告白した。

×

×

「信仰は理屈ではない」と、よく言われる。たしかに「信仰は理屈ではない」と思う。だが、それを深く悟っていると思われる信仰の人に出会うことは、わたしの場合、極く稀れである。

信仰は理屈を無視し、拒否することではない。なのに、信仰と理屈とを対立的に考え、理屈を悪魔の子のように拒否する熱烈信仰人？がいる。しかし「信」は「理」を拒否するところに成り立つのではない。また一方に於いては、信仰と理屈とを融合させ、信仰に於いて理屈を包み込むことで「信仰は理屈ではない」と言う人もいる。しかし、結論を先に言えば、信仰の「信」は、「信」も「理」も越えたところで成り立ち、成り立ったそこが「覚」なのである。

一般に、信ずるとは、自分をこちらにおき、信ずる対象を自分の向こう側において「それ」を信ずる、というふうに理解されている。神は天にいまし、人は地に居て、その神を人が対象化して信ずることを「信」だと理解するなら、それは厳密には「信」とは言えない。なぜなら、物事を対象化するということは、その人の知識の働きの働きであるからだ。知識はどの場合でも、知るものと知られるものとの対象的立場を離れないからである。

×

×

×

×

とすると、「信仰は理屈ではない」という、その人の「信」は、なんのことも「理屈の立場」に他ならないということになる。人がどれほど自分の「信」を強調しても、自分の信の対象として「神」を自分の向こう側に立てるかぎり、それは「信仰を理屈化している」ことから免れてはいない。これは、宗教を語り、信仰を語る者が落ちる極めて危険な「落とし穴」だと言えよう。

×

×

「信」は対象化を越えたところにある。と言っても、対象と一つとなることでもない。神と人とが一つになること、融合することでもない。信ずるものと信ぜられるもの、そのような二つのものが未だ無いそこ、つまり一つ二つというものに分かれる以前、言うならば主と客とが生まれる以前、有無の未だ生まれる以前の何も無い「すっからかんのすっからか」のそこに「信」の世

界がある。

だから、俗なる自分が地に居て聖なる神が天にいまし、その俗なる自分が天にいます聖なる神に向かうこと、つまり対象的に神に関わること、即ち、そのような形の「私は神を信ずる」という「信」は、それがどれほどの謙虚をもった熱烈な信仰であつたとしても、そこでの信仰の対象としての神は、私という自我の欲望の対象になつてゐるのである。所詮、それは自我の枠内の業なのである。したがつて、そのような「信」を宗教とし、また信仰だと思ひ違ひをしてはならない。この一点はとても大切なところである。少なくとも「宗教」を語り、「信仰」に生きる者にとつて絶対に曖昧にしてはならない一点である。以下、もう少しこれについて「信と覚」というところから見つめてみよう。

×

×

イエスは次のように言われた。

だから、言つておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。…鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが神は鳥を養つて下さる。…野原の花がどのように育つか考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言つておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾つてはいなかつ

た。今日は野にあって、明日は炬に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。

—ルカによる福音書十二章二二節以下—

このイエスの言葉をわたしたちほどのように聞けばよいのだろうか。イエスは鳥や花のことを「考えてみなさい」と言われるが、それは鳥について、または花について生物学的、植物学的な知識でもって、それらを対象化して「考えよ」ということではない。そうではなくて、今、自分の目の前に命している鳥、命している花そのものに、命のたぎりの事実を直接看破し、その事実を心にしてしまうことを、イエスは「考える」と言ったのである。同じイエスの語りを、マタイによる福音書六章に於いては「よく見なさい」「注意して見なさい」と言われている。ちなみに、ルカによる福音書の「考える」とは「気付く。看破する。についての事実を心にしまう。見きわめる。」という要素を持つ言葉である。（織田昭—新約聖書ギリシャ語辞典—）

X

X

さらに、ここで、イエスが「考えて見なさい」ということは、鳥や花を見ることで、そこから人が自分の知恵や知識で神の存在を推理判断するということではない。このところはとても注意深く反省しなくてはならない一点である。なぜなら、人が花や鳥の存在に不思議を覚えて、

「やっぱり、これらを生かしておられるのは、神であり、神に違いない」と、神についての推理や判断をくだすならば、それは所詮、人の知識や知恵による主観的な結論にしかすぎないからである。と同時に推理された神を前提にして鳥や花の存在を説明しようとする立場も主観的な結論である。このような作業を観念論哲学はする。

また、さらに、「考えて見なさい」とは、自分が生み出すイメージの世界を生むことでもない。イメージの世界は理屈を越えている、空の鳥を見、花の装いを見る人が、それらに於いて限りなくイメージの輪を生み出し、それを自覚の世界に引き上げて語ったり記したりし、それに接する人が自分の内面に反応してイメージの共感と感動とを広げ、そこに自分を見るところという働きを持っているのが文学の言語であるとするなら、それらの言語には何かの主張や教えは一切ないのだが、それはやっぱり自己を表出する作業の言葉の一つである。その意味で、宗教の言葉と文学の言葉とは、まさに紙ひとえの差で異なっている。

x

x

イエスが目の前に命している鳥や花を見て「考えてみなさい」「よく見なさい」と言うとき、思い悩み苦勞して生きている自分の慰めのためにそれらを見なさい、と言っているのではない。そうではなく、目の前に命している鳥、花その事に直に躍動^{じか}している命のたぐりを、直接に命しなさいということである。直接に命するそこでは、もはや「鳥」も「花」も「自分」もない。そ

のような分別的な働きはそこにはなく、ただ、命のたぎりだけがたぎっている、所謂「すっからかんのすっからか」なのである。まさに、鳥や花の命のたぎりその事が直に、人を根源的な命のたぎりの世界に目覚めさせるのである。それが神、又は「神の支配」に開眼するということである。だからこそイエスは次のように言われた。

神の国（神の支配、神の命のたぎり）は、見える形では来ない。「ここにある」「あそこにある」と言えるものでもない。実に、神の国は、あなたがたの間にある。

— ルカによる福音書十七章二十節 —

目の前に命している鳥や花はまさしく、命のたぎりそのことを語り響かせている。その語りやその響きを、自我の側の理屈や感情や経験といった働き以前のところで命が命することが「信」であり「覚」だと言えよう。そこでこそ本来の明るみの世界、つまり本当の幸いなる個人の生き方、信頼の対人関係、安心の社会が現成してくるのである。それへの開眼を人の側からの業として説かれたイエスの提示が、「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだけ一人としてわたしの弟子ではありえない」という命令言語のようになったのである。（ルカによる福音書十四章三十三節）しかしそれは先に述べたとおり、自我に囚われて見えなかった自分の生の根源

への自覚、それは神と神の支配の明るみに生きている自分の本当の命の覚醒ということなのである。このような命の直接開眼を旧約聖書の詩編の人は次のようにうたいあげた。

もろもろの天は神の栄光をあらわし、

大空はその御手のわざをしめす。

その日、言葉をかの日につたえ、

この夜、知識をかの夜におくる。

語らず言わず、その声聞こえざるに、

そのひびきは全地にあまねく、

その言葉は地のはてにまでおよぶ。

また、ある人は次のようにうたった。

花は黙って咲き黙って散って行く。

そして再び枝には帰らない。

けれども、その一時一処にこの世のすべてを託している。

一輪の花の声であり、一枝の花の真である。

永遠の滅びぬ命のよろこびが、悔いなく、そこに輝いている。

—「花一輪」柴山全慶—

×

×

これらは命が命をそのままにうたいあげた「信と覚」に於ける語りであって、神と自然との関係を客観化して語ったものではない。また自己のイメージの世界を言語化したものでもない。これは宗教の言葉である。それは人を本来的な生へ生かす命のたぎりをそのまま無心に証示しているのである。まさにイエスが言う如く「聞く耳ある者は聞くがよい」である。

×

×

信仰の「信」と信念の「信」とは違う。信仰と信念とを混同してはならない。これについて使徒パウロは次のように言った。

兄弟たち、わたしは彼らが救われることを心から願ひ、彼らのために神に祈っています。わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証ししますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかつ

たからです。

—ローマの信徒への手紙十章一節以下—

熱心な信仰の人と見える、その者が、実はただの信念の人（神の義を知らず、自分の義を求めようとする人）にすぎない、とパウロは言う。信仰と信念との違いはどこにあるのだろうか。

×

×

一般的な国語辞典で「信仰」の語義を見ると「神や仏を崇め尊び、絶対に従うこと」とあり、また「信念」の語義は「理屈を越えて、かたく思い込むこと」とある。このような一般的な国語辞典に厳密さを求めることは出来ないが、それでも、「信仰」と「信念」についての差がおぼろげながら示されているように思う。それは「信仰」は、自分の思いを謙虚にし、神や仏を崇めることであり、一方、「信念」は、自分の思いを全面に出し、自分の思いで「かたく思い込む」ということである。したがって「信念」のことだけを言えば、自分の知恵や経験が生み出した解釈や判断を固守し、それを最も正しいと思い込むことだと言える。また、自分の思いが絶対に正しいと自分で勝手に決めつけ、決めつけた自分に、自分が執着することであるとも言える。このような信念の立場をパウロは「正しい認識に基づかず、自分の義をたてる」と言った。

×

×

「信念」の立場は、その思いがどれほど体系化され、理屈で構築されていても、それは所詮、
当の者の思いにすぎない。

自分が自分の思いを最も正しいと自分で思い込み、その自分の思い込みで自分を立たせる、と
いうことは、自分の主人は始めから終わりまで「自分」であることの表明である。これは独りよ
がりの利己主義、自分中心主義の最たる姿である。なぜなら、利己主義は「自分は自分によつて
自分なのである」という基盤の上に構築される自分の在り方だからだ。このような自分の在り方
を「自我」と言う。

×

×

「信念」の立場が秘めている問題は「利己主義的在り方」にある。そして、その内容を注意し
て見るなら「信念」即ち「利己主義的在り方」は、自分だけを拡充拡大することに眼目がある。
自分以外のすべてを自分の為に存在するものと化してしまふ。自分を拡充拡大するためには、人
も物も神も仏も自分の従属物として利用する。彼は自分で決めた価値基準に照らして、自分に関
わるすべてのものの正否、善悪を決定する。実に「信念」の立場は破壊と混乱とを招く。「信
念」は、自分に望ましい自分と成るためにだけ生きる独善的な暴君であり、自分に自ら惚れ込み
陶酔するナルシスト（自惚れる者）だと言えよう。それは、「その熱心は正しい認識（悟りによ
る深い洞察）に基づかない」とパウロが指摘するとおりである。

一見、強い生き方、在り方のように思われる「信念」の立場は、その実、虚無である。「自分は自分によつて自分である」という立場は、幻想以外のなものでもない。なぜなら、自分を支える当の自分など何処にもないのだ。単純に言えば、だれも自分の手で自分自身を持ち上げる事など出来ないのに、それが出来る自分が実在するかのように思うのは幻想にしかすぎない。

光があり、空気があり水があり、木々があり、さまざまなききものがおり、いろいろな人がおり、天があり地がある。人は、それらとの対他関係に於いてこそ、自分が自分と成るように大なる命に祝福の限定決定を受けている。これこそ「創造に於ける人間の自然」なのである。にもかかわらず、対他関係を断ち切つた所で、自分が自分で有り得るかのような「自分」が実在していると思ひ込むのは狂気の沙汰である。そのような自分は幻想である。このような自分の現実に開眼せず、自分で自分を生きようとするなら、人は必ず虚無の深淵に沈む。

確かな土台の上に立っていると思ひ込んでいる者が、その土台が確かでないことに気付くとき、人は必ず絶望する。一切が意味を失ひ虚無と化す。彼には救いはない。ところが、「信念」に生きる者は、「信念」の虚妄性に密かに怯えているのだ。だが、彼はその不安をかき消すかのよう、熱心に信念を燃え立たせる。彼はますます正義を叫び、善を真理を掲げる自分に執着し、多

くの敵や悪魔を作りヒステリックに攻撃する。一方、それが出来ない常識の信念者は、目先の欲を満たす事で不安をまぎらわし虚無化し頹廢の道へ行く。これこそ現代の時代状況、人間の状況である。このような状況から人間を本源的に救い出すための、言わば診断と治療の提示が先のパウロの提示である。再度その言葉に耳を傾けよう。

兄弟たち、わたしは彼らが救われることを心から願ひ、彼らのために神に祈っています。私は彼らが熱心に神に仕えていることを証ししますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

×

×

「信念」の在り方はさらに問題性を抱えている。それは、自己完結的であるということだ。自己完結的とは、それ自体で完成しているということ。彼は自分の存在に自信満々なのだ。だから「信念」の立場に生きる者の姿ははなはだ傲慢であり高慢である。表面的に謙虚に見えても、その内面は傲慢心で満ちている。自分でそれと気付かなくても、その在り方が「信念」に依るならば自己傲慢から逃れることは出来ない。なぜなら、自分が謙虚であることが人間として最善であるという自らの信念に留まる傲慢に居るからだ。彼は自分が謙虚であるということに誇りと安

心とを得ることで自分の拡充拡大をはかっているのである。しかしそれは「偽善」に他ならない。だからイエスは言われた。

あなたたち偽善者は不幸だ。杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強欲と放縦で満ちているからだ。もの見えないフアリサイ派の人々、まず、杯の内側をきれいにせよ、そうすれば、外側もきれいになる。あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている。

—マタイによる福音書二十三章二十五節以下—

×

×

「信念」の立場は、対他との関係を断ち切るだけでなく、自分自身との関係をも断ち切る。即ち自分が自分を見失うということである。「自分はこれで正しいのだ」と自分について思い込む。そこで起こることは、考える事の放棄である。考える自分を放棄して、思い込んだ自分に留まる。ある一つの政治的イデオロギー（考え方）や宗教のドグマ（教義）を絶対化し、それと自分を同化するとき、その者はそのイデオロギーやドグマのロボットと化す。彼はそれらの表情となり、その言葉を語り、その振る舞いをする自分を最善且つ真実の自分だと思い込んでしまう。彼はそ

れ以外の考えや生き方を非真理として排除するばかりか、それらを敵と見なして攻撃し破壊しようとする。そうすることで満足し平安を得る。まさにその様子は狂気である。このような思考停止の状態を「統一化現象」という。真面目に真理を振りかざす信仰の人もこの落とし穴に落ちるから恐ろしい。

しかし、それらを笑う世間の常識に身を置く世俗的常識人も結局、「世間の常識」を信奉する「信念」に生きる人であり、みな同じであることを忘れてはならない。

結局、彼らは見ても観えず、聞いても聴かず、皆同じである。自分の自我に執着するだけである。だからこそパウロは言う。「この熱心さは、正しい認識（悟り、深い洞察）によるものではありません」と。

×

×

「信念」の立場に生きる者の根本的な問題はどこにあるのか。それは、存在の根拠である命のたぎりを直（じか直接）に経験しないまま、又は覚醒しないまま、ただの自分が見たり、聞いたり、教えられたりした特定のそれを、自分で正しいと思い込み、そこを自分の基盤、または出発点とすることにある。しかしそのような自分の基盤は、自分が造りだした幻想なのである。そのような信念が作りだす虚妄から人間が開放され、本当の自分に目覚めるためにはどうすればよいのか。イエスの生を習う意義はここにある。

信仰と信念とを混同してはならない、と先に言ったが、信仰を明確化するために引きつづいて信念について、今一步踏み込んで反省的に考えてみよう。

信念とは自分の思いで「かたく思い込む」ことである、とするなら、それは、自分の思いを自分がかたく思い込む、ということである。その場合の「自分の思い」とは、自分が生み出すこと、自分が描くこと、又は自分が考えるということであるから、自分の出発点、又は自分の根拠を自分においている事になる。そして、その自分を自分が自覚している、その在り方が「かたく思い込む」ということである。これこそ、「信念」の立場が秘めている利己主義的な在り方にほかならない。このような人間の在り方の問題性をイエスが指摘されたと思われる出来事が福音書にある。

× ×

群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言つて下さい。」イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」そして、一同に言われた。「どんな貧欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によつてどうすることもできないからである。それから、イエスはたとえを話された。

ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、「どうしよう。作物をしまっておく場所がない」と思い巡らしたが、やがて言った。「こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。」しかし神は、「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。

—ルカによる福音書十二章十三節以下—

今、ここで注目したいのはイエスが語られた「たとえ」の部分ではなく、調停役になってほしいと申し入れた人にイエスが語られた言葉である。

イエスは男に言われた「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」と。これは、イエスが彼の申し出を拒否された言葉だが、それは、「ちよっと待ってください。あなたが勝手に、わたしをそのような者に作り上げてもらっては困るなあ」という当惑、又は抗議的な拒否の言葉である。

×

×

自分勝手に、ある事や、ある人のイメージをつくりあげ、自分でつくったそれが、本当のものだと、かたく思い込み、それを褒めたり、貶けなしたり反応しているなら、その人は全くの愚か者であろう。

問題は、自分勝手な思い込みで作り上げた対象を、本当のそれとなして、対応している自分の誤りに気づかないことである。本当に知ってもいないのに知ったつもりになり、それについて本当に語っていないのに、事実を語っているかのように語る自分の誤りに気付いていない事。またそれを本当に見てもいないのに見ていると思いついでいる事が問題である。だからイエスは、「見ても見ず、聞いても聞かず」と言われた。(マタイによる福音書十三章一三節以下)更に、「見えないのに『見える』とあなたたちは言っている。そこに罪がある」とも言われ、加えて「むしろ見えなかったほうがよかったのに」と強烈に批判なされた。(ヨハネによる福音書九章四十節以下)

×

×

なにも無いのに有ると思い込むことではない。問題は自分が作り上げたそれを、「それ」でないのにそれだと思いつくことである。自分で思い込んだそれは、自分が作り出したイメージである。そして、そのイメージはたいいの場合、社会的に通用している言葉によって限定されている。たとえば「海」を一度も見たことがない人間でも、「海」という言葉を知っており、「海の

イメージ」は描ける。その事でその人は「海」を知っており、見たような気になることができる。しかし、彼は本当の海を知ってはいない。だから、この場合その人が、本当に海を知るためには、自分が自分の内で作り上げている「海についてのイメージ」または「海を限定している言葉（言語）」を突破した次元で海自体に出会わなくてはならない。その時に会おう「海」は言葉（言語）を越え、作られたイメージでは包みきれない神秘としての「事」なる海である。そこで現成してくる海は「信」も「理」も越えた「海そのもの」の世界、命のたぎりとしての海の世界である。そのとき海は単に「海である」などと言語化で限定出来ないし、イメージ化された「海」でもない。

×

×

イエスに調停役を申し出た男は、自分勝手にイエスのイメージを仕立て上げ、仕立てたイエスを、事実のイエスに強要したのである。彼は自分が欲するイエス像を、事実のイエスだと勝手にイメージしてしまった。イエスさまなら、私が直面している兄弟間の遺産分けについて、私が納得出来る調停をしてくださる方である、というイエスのイメージを作り上げていたのである。しかし、そのようなイエスは何処にも存在しない。彼が知るイエスは仮構のイエスである。だから「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に作り上げた（任命）のですか」とイエスは言われたのである。ここでイエスが提示されていることは、物や事のありのままを見ないで、自分

勝手に、又は社会的な通念（常識的な道徳や倫理観を含め）でその存在や価値を限定してはならないということであり、同時に、物や事のありのままに開眼しなさい、ということである。

したがって、先のたとえの最後の部分でイエスが「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者」と提示された者とは、ものや事のありのままに開眼しないままで、自分が勝手に言葉（言語）やイメージで仮構したそれを本当のそれとすることで、「それ」を知ったと思い込んでいる者、ということである。ひよつとすると、私たちは多くの言葉で物や事を説明し、さまざまなイメージを持つことで納得したり、させたりしているその努力が、実は、物や事のありのままから、かえって遠ざける作業をしているのではないだろうか。本当の物や事の姿、つまりありのままのそれは、私たちが、ことさらに言葉（言語）やイメージで構築しようとするその仮構の努力を捨てたところ（心を貧しくしたところ）、又は言語やイメージを越えたところ、に初めから有りつづけているのだ（神の支配、命のたぎりはありつづけている）。イエスが生涯をかけて提示したことはそのことだったのではないだろうか。ここに「覚」が成り立つ。だからイエスは言われた「なんと幸いなことか。心の貧しい者は、神の支配はその人たちのものである」と。

（マタイ福音書五章三節）

×

×

ありのままのイエスを知らないままで、自分で作り上げたイエスに対応し、そのイエスに失望

して自滅していったと思われるひとりにイスカリオテのユダがいる。彼については聖書や伝統的な諸説があるが、とりあえず、一つの例として見ることにする。

ユダは、自分が抱く願いを叶えてくれる人がイエスだと思い込み、その弟子になったのではないか。ところが、イエスが自分の期待どおりの人間でなかったと思い込んだとき、彼にとつてイエスは価値なき存在となった。その結果がイエスに対する裏切りとなったとすれば、それはまことに奇妙なことになる。

ユダが思い描いたイエスとは一体誰なのか。そのようなイエスは、世界のどこにも存在せず、ただユダの思い込みの内にだけ作り上げられた、いわば仮構のイエスである。自分が仮構したものに価値を置き、それを有りのままのイエスだと思い込んだ結果、イエスを十字架刑へ追いやった。結局、ユダはイエスには出会っていなかったのである。このような事態は、ユダに於いては過激な形で表出したが、他のイエスの弟子たちにも同じ事態がイエスへの無理解として生じていたのであり、さらにそれは、人間一般に於いて生じる事態でもある。即ち、私たちが自分の外なる事や物や者と関わるとき、また、自分が自分に関わるときに於いても同じである。

例えば、なぜイエスが「空の鳥をよく見なさい……野の花がどのように育つか、注意して見なさい。」（マタイによる福音書五章二六節以下）と提示されたのか。それは、鳥や花を見ているというその事が、単なる説明された鳥や花の言語、又は、感性で描いたイメージの花や鳥をそこ

に見るだけでなく、花その事、鳥その事、即ち花や鳥として事実たぎっている命に直接開眼せよ。ということなのである。しかし人は相も変わらず、鳥を見て鳥と思ひ知るだけ、花を見て花と思ひ知るだけで、自分は花を見た、鳥を見たと思ひ込む。そして時として、その言葉をいじくり、そのイメージをひろげること熱心になるだけで終わる。結局、その人は鳥や花の事実を覚^みないまま、それらを見たと思ひ込んで終わる。

×

×

イエスは言われた。

あなたがたは聞くには聞くが、決して理解しない（悟らない）。見るには見るが、決して認めない（霊的に洞察しない）。この民の心は鈍り（感じなくなり）、耳は遠くなり（聞きにくくなり）、目は閉じてしまった。

— マタイによる福音書十三章十四節以下 —

×

×

わたし達は、見れば見たと思ひ、聞けば聞いたと思ふ、そして、知れば知ったと思ふ。その結果、そのものや事の真実の姿を見失ってしまう。だから、イエスは「よく見よ。よく聞け」と提^し示された。（マタイによる福音書六章二六節以下）

イエスが提示していることは、人間または万物を、今ここにこの姿で存在させる本当の根拠、存在の本当の全体ともいべき命のたぎりに、誰もが眼を開かれることである。それによって、生きて有ること、存在していることの偉大さ、凄さ、有り難さに、あらゆる人が一人も欠けることなく歓喜し賛美の声を高らかに歌い上げることである。

だからイエスは言われた。

これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなた方の喜びが満たされるためである。

—ヨハネによる福音書十五章十一節—

×

×

見るとか、聞くとか、知るとかいうことは、私（主）がおおり、対象（客）があつて、それを、見る、聞く、知るといふ行為である。その場合に私（主）と対象（客）との間を繋ぐものが言語である。例えば、「桜を見る」という場合、私が、桜を、見る、ということであるが、ただ対象を漠然と見ているのではなく「さくら」という言葉によって、対象をとらえて見ているのである。つまり、いわば言葉（言語）で対象を限定して見ること、私はさくらを見た、と思うのである。この場合一般的には桜についての社会的な通念、例えば「バラ科に属する落葉高木で春にうす赤

いろの美しい花が咲き、その種類はいくつかあつて、堤や道のわき、公園、庭などに植えられ、日本の国花とされ、その材は建築や家具に用いられる」などという桜の樹の解説知でもつて見たそれを、「私はさくらを見た」と確信するなら、それはいささか浅薄な桜の見方であるとは言えないだろうか。それにしても、さまざまな人が、さまざまな思いと意味とをこめて言語化して当の桜を見ているのだが、一体誰が本当に「さくらの樹」を見たと言えるのだろうか。ひよっとすると、誰も本当のさくらは見ていないのではないかと思う。このことは聞く場合、知る場合にも同じである。

×

×

言葉化、言語化するとは、人（主）がそのものや事（客）を限定固定化するということである。しかし、言葉化（言語化）されたそのものや事は、もはやそのもの、そのことではない。厳密には、そのものであつてそのものではない。その事であつてその事ではないと言ふべきであろう。

×

×

以上の主と客との関係について西田幾太郎は初期の著書である「善の研究」の「純粹経験」という章の冒頭で述べていることは参考になる。少し解説が必要かも知れないがそのまま紹介する。

「経験するといふのは事実そのままに知る意である。全く自己の細工を棄てて、事実にしたが

うて知るのである。純粹といふは、普通に經驗といっているものもその実は何らかの思想を交えているから、豪も思慮分別を加えない、真に經驗そのままの状態をいふのである。例えば、色を見、音を聞く刹那、未だこれが外物の作用であるとか、我がこれを感じているとかいうような考えのないのみならず、此の色、此の音は何であるかという判断すら加わらない前をいふのである。それで純粹經驗は直接經驗と同一である。自己の意識状態を直下に經驗したとき、未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している、これが經驗の最醇なるものである」

—西田幾太郎全集一卷九頁—

×

×

西田が言う「純粹經驗」又は「直接經驗」とは、一般に言う「經驗」以前の經驗のことである。例えば先のさくらの樹で言うなら、人（主）がおり、その対象（客）として「桜の樹」がある。人は桜を見て「桜」だとし、桜を知ったと思う。だがよく考えて見ると、なぜそれを「桜の樹」とするの、その根拠は何かと問われると、見ている者が「桜の樹」だから「桜の樹」と言葉化しているにしかすぎない事がわかつてくる。一体誰がそれを「桜」としたのか。「さくら」とさされている樹そのものからすると、「誰が、私を、桜、の、樹、としたのか」ということになる。事実、そこに在る「桜」とは、人が勝手に言葉でもって作り上げた（仮構した）ものである。つまり「さくらの樹」という言葉で、眼前に在るそれを抱え込んで、それを「さくらの樹」として

しまったのである。そうすることで先に述べたとおり「桜の樹とは、バラ科に属する落葉高木で春にうす赤い美しい花が咲き日本の国花とされ、その材は建築や家具に用いられ」というように様々な社会的な価値づけをされ、他の樹と差別されて「さくらの樹」としての通念が出来上がることになる。そこでは「さくら」と称される「それ自体のありのまま」は完全に消失してしまっている。

だから、「純粹経験」とは、それ自体のありのままを、ありのままに経験するそのところを言うのである。つまり、そこでは一切の言葉はない。そのところを西田は「豪も思慮分別を加えない、真に経験そのままの状態」と言い。「例えば色を見、音を聞く刹那、……この色、この音は何であるかという判断すら加わらない前、……自己の意識状態を直下に経験したとき、未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している」というのである。

「さくらの樹」ということで言うならば、そのありのままのそのでのそれは、「さくらの樹」という言語化をはるかにこえた神秘であり、命のたぎりその事だと言える。だからこそ、私たちが「さくらの樹」を見るとき、その事実を十分に悟り知って「さくらの樹」を見、「さくらの樹」と言葉すべきなのである。このような意味での直接経験を欠いたまま、やたらに「さくらの樹」を見、「さくらの樹」を語るなら、それはさくらの樹を見たこと、語ったことにはなりませんよ、と提示されたのがイエスである。それを「見て、見ず。聞いて聞かず」と言われた。

このことは、聖書の言葉を学び、聖書の言葉を語る場合にはもつと重要なこととなる。聖書の言葉の世界への直接即経験を欠いたままで、ただそこに記されてある言葉や文字そのまま、又はそれらの説明をもって事足れりとするなら、また、そのように聖書の言語を取り扱うなら、それがどれほどの聖書学的知識でもってしても、またどれほど深い神学的営為であつたとしても、真に聖書の言葉が秘めている根源的命のたぎりの歎喜は得られないし、語る事も出来ないだろう。ましてや、聖書の文字や言葉をそのまま機械的に教条的に神の唯一の言葉であるとするなら、それは問題外である。

直接経験について想起する一つの出来事がある。それはすでに記した事（みちしるべ文庫「私の向こう側」一六頁）だが、その経験が鮮明に私に提示してくれたことは、今までヒマラヤシューザーという樹だと思い、見ていたその樹が、私と一体になり、すべては空中に消えたのである。その出来事によつて気付かされたことは、松下は松下であるが、またヒマラヤシューザーという樹であるが、しかし存在の眞実は、松下と称される存在、ヒマラヤシューザーと称される樹という枠を越えた、命のたぎりそのものだったということである。それは言葉の枠で構成されていたそれが消え去り、ありのままのその直接経験だったのである。勿論それが鮮明に理解されるよ

うになつたのは、その後の反省的な作業によるものだが、とにかく、それまで私は言葉（言語）で構成していたヒマラヤシーザーという樹をもつて、それが樹の事実、真実だと理解していただ。そのような言語世界の仮構が破られたのである。そのとき全てのものや事の底で命のたぎりに出会つたのである。言うならば、それはヒマラヤシーザーと言葉されるもののありのままなるそれへの覚醒だつたのである。

×

×

それ以後、松下という自我の存在のその底に、さらにすべての存在のその底に、言語の世界で構築される一切の観念世界を越えた、廣大無辺な命のたぎりが永遠の栄光として、歓喜として、愛として透明化されてきたのである。それこそ、ヨハネが言う永遠のロゴスであり、キリストの世界なのだという事実への気付き、又は覚醒である。（ヨハネによる福音書一章一節以下）

とはいえ、これは私だけの特別な体験ではない。だれもがその命に等しく抱きかかえられているのであって、その者が言語化された世界の相の仮構性に開眼するなら、かならずありのままの世界は現成して来るのである。イエスはその世界を「神の支配」と言つた。そして、それは「あなたの只中でたぎっている」（ルカによる福音書七章二一節）と言われた。

×

×

十二使徒の一人フィリポとイエスとの興味深い会話がヨハネ福音書に記されている。

フィリポが「主（イエス）よ。わたしたちに御父（神）をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間に一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父（神）を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父（神）をお示してください』と言うのか。わたしが父（神）の内におり、父（神）がわたしの内におられることを、信じているのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父（神）が、その業を行っておられるのである。わたしが父（神）の内におり、父（神）がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。」

—ヨハネによる福音書十四章八節以下—

この記事はヨハネ的であるが、これをとおして弟子たちがイエスや神をどのように理解しているかがわかる。

×

×

イエスと弟子との間には壁があった。それは、信頼関係に於ける壁ではなく、イエスについての弟子たちの無理解という壁であり、存在理解についての構造的な差異である。

先のフィリポとイエスとの会話に於いても、その差異が明確に出ている。